佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
〒840－0041 佐賀市城内1丁目15－23 TEL.0952－24－3947 FAX.0952－25－7006

佐賀新聞 2009(平成21)年6月27日(土) 県内文化欄 文化時評

県内文化

美術

美協の次世代 着実に深化

野中 耕介

「今年は、なかなか面白いやろう？」……と、「第92回佐賀美術協会展」（県立美術館、28日まで）の会場で、同協会理事長・上瀧泰嗣氏が破顔一笑された。なるほど、会場を見渡せば、今年の美協展は第一印象が「明るい」。これは単に作品の色味を指してのことではなく、全体の展示が発散するみずみずしい空気のようなもの、その印象である。

そう見える理由は何だろうか。もちろんベテランの堅実かつ充実した仕事ぶりもあるが、それ以上に、美協の次世代を担う若手たちの表現が、多様化しつつ着実に深化を遂げていることがあげられよう。各部門の高位受賞者の名を見れば、その多くが20歳代であると思われ、しかも、最近の県内外のグループ展や団体展等でもその名をよく聞く人々である。かれら若手の台頭が、今年の美協展の煌めきの源であることは間違いない。

いずれの受賞作もその技術、芸術性ともに高度であり、拮抗しているが、中でも、私がとりわけ心惹かれたのが、鳥谷さやかの染織「記憶の回路」（美術協会賞）であった。鳥谷の作品は過去本稿で取り上げたことがあるが、今回の受賞作は新たな要素を大胆に取り入れ、かつ破綻のない構成がなされており、前回とは見違えるほど技術が洗練されている。

筐体やフレームにギミック（あるいはそれ風の構造）を仕込む表現方法は、例えば池田龍雄やジョセフ・コーネル等のオブジェを思い出させるが、鳥谷の作は染織の質感と平面性、独特の軽やかさを積極的に生かした点が新鮮であり、カテゴリーの枠組みを越えた、ものとしての魅力の創出に見事に成功している。審査評にもあるように、染織のみならず佐賀県の工芸の可能性を押し広げた意欲作であり、本展中の白眉であった。

美協展は創設以来、さまざまな困難に直面しながらも、今日の美術を見つめ、明日の美術を模索してきた。近年は「もうひとつ盛り上がりに欠ける」という声もしばしば聞かれたが、なかなかどうして、創設以来の志はいまだ健在ではないだろうか。

……今月、どうしても伝えたいことをもうひとつ。美に対して誰よりも憧れを持ち、郷土に豊かな美の風土を育てることを願っていた「画廊憩ひ」が休廊となった。毎回ユニークな企画をなされていただけに、本当に寂しい。「中島さん、また、美について、いろいろとお喋りしましょう。教えていただきたいこともたくさんあるのです。皆、あなたとの再会を待っていますよ」

（県立美術館学芸員）

文化時評 2009